

パークの集合行動論におけるタルド社会学の影響⁽¹⁾

池 田 祥 英

はじめに

本稿では、ロバート・エズラ・パークの集合行動論において、ガブリエル・タルドの学説がどの程度受け入れられ、あるいは受け入れられなかったのかを検討する。タルドの学説は、フランスにおいては1898年の『社会学年報』の創刊以降、同誌に携わったエミール・デュルケームとその協力者たちの影響力が強くなり、それに伴ってタルドの考え方は次第に後景に退いていくことになった。それに対してアメリカでは、フランクリン・ヘンリー・ギディングス、エドワード・アルズワース・ロスのような心理学的社会学の立場を取る論者が影響力を持ち、心理学においてもジェームズ・マーク・ボールドウィンが「模倣」を論じるうえでタルドに多く言及するなど、20世紀初頭においてはタルドもかなり取り上げられていた⁽²⁾。同じころ、パークはドイツに留学して、「群集と公衆」(1904年)と題する集合行動論をテーマとした博士論文を刊行したが、ここでは、これとよく似たタイトルの論文「公衆と群集」(1898年)を書いたタルドについてもたびたび言及しており、かなりタルドの影響を受けているように見えるかもしれない。とはいえ、結論を先取りして言えば、パークはタルドの「群集／公衆」とはかなり異なった概念を作りあげている。このパークの概念がその後のハーバート・G・ブローマーの「群集」「公衆」「大衆」の区別にも受け継がれていったと考えられる。

これらの点について明らかにするために、まずはパークが社会学者となるまでの行程と、タルドへの言及が見られる論考について検討する(第1節)。続いて、パークによるタルドへの言及

(1) 本稿は2023年3月22日に早稲田大学戸山キャンパスで行われた第5回知の社会学研究会における「アメリカにおけるタルド社会学の受容——R. E. パークの場合」と題する報告に基づいている。

(2) デュルケームやマックス・ヴェーバーに比べると、タルドがその後の社会学理論の展開において果たした役割はあまり大きくないように見える。たとえば、『社会的行為の構造』(1937年)においてタルコット・パーソンズは、わずか1か所しかタルドに言及しておらず、それもピティリム・A・ソローキンがタルドのデュルケーム批判を高く評価していることに対する批判的な言及のなかに登場するだけである(cf. Parsons 1937=1986: 119-20)。しかしながら、パーソンズ以前にはアメリカにおいてもタルドの社会学がある程度取り上げられていたのも事実である。ソローキンは、数多くの学説を取り上げるなかでタルドについても言及し、比較的高く評価していた(cf. Sorokin 1928: 467-8; 636-40)。タルドがアメリカの社会学に及ぼした影響については、Clark (1969: 65-9); Ginneken (1992: 222-9); 土屋 (2003a: 41) を参照。

について、「群集」(第2節)、「公衆」(第3節)、「模倣」(第4節)に分けて、それぞれ検討する。最後に、パークの集合行動論や相互作用論において、タルドの議論はかなり批判的に取り上げられたものの、「対立」という概念がパークの集合行動論の中で生かされたことを明らかにしていく。

第1節 パークとその著作について

まず、パークの略歴について簡単に振り返ってみることにしよう⁽³⁾。パークは1864年にペンシルベニア州に生まれ、ミシガン大学を卒業した後に、新聞記者となった。しかし、新聞に関してさらに研究を深めるためにハーバード大学に戻ることになる。さらにドイツに渡り、ベルリンにおいてジンメル⁽⁴⁾の講義を受け、テオドル・キスチャコフスキーが書いた『社会と個人』(1899)を読んだことで、彼が師事していた哲学者ヴィルヘルム・ヴィンデルバントの指導を受けるべく、まずシュトラースブルク(現在のストラスブール)、次いでハイデルベルクで研究を続ける。1903年に『群集と公衆——方法論的・社会学的研究』により博士学位を取得した(刊行は1904年)。アメリカに戻ったパークは、ハーバード大学で助手を務めた後、1905年より黒人教育家のブッカー・ワシントンのもとでアラバマ州タスキーギの黒人向け職業訓練校で広報担当を務める。1912年にウィリアム・I・トマスと知り合い、1914年からシカゴ大学に講師として迎ええられることになった。1923年にアルビオン・W・スモールの退職に伴い正教授となり、1933年まで務めた。シカゴ大学退職後は1944年に死去するまでフィスク大学で教鞭をとった。

パークは、ゲオルク・ジンメルの影響のもとで、社会を社会的相互作用としてとらえている⁽⁴⁾。そしてこの社会的相互作用は競争、闘争、応化、同化という四つの段階からなる過程をたどると考えられた。競争は相手とのコミュニケーションを欠いた無意識のうちの競合であるのに対して、闘争は互いに相手を認識したうえでの競合であり、コミュニケーションが介在する段階である。応化は競争や闘争が——いまだ存続しながらも——ある程度社会的にコントロールされて社会が組織化されることであり、同化は個人や社会が共通の文化的基盤を獲得して融合していく過程として位置づけられる。このうち、他者をそれとして意識することなく進む競争の段階は「コミュニティ」として位置づけられ、他者を競合相手として認識したうえで進む闘争、応化、同化の段階は「ソサエティ」として位置づけられることになる。このような理論枠組みを都市の研究に応用したものが人間生態学である。

パークがタルドに言及するのは、主として集合行動の領域である。そのなかで、本稿ではパークの学位論文である「群集と公衆」(1904年)、およびアーネスト・W・バーヂェスとの共著である『科学としての社会学入門』(1921年)における集合行動についての章を検討することにする。

(3) パークの略歴については、大道(1972: 160-2)、秋元(1989: 77-137)の記述に基づいている。

(4) パークの集合行動論全般に関しては、土屋(1993a, 1993b, 2003b)を参照。

まず、「群集と公衆」論文は、そのタイトルだけを見ても、タルドの学説との関連性を容易に読みとれるように思われる。というのも、周知のように、タルドは『世論と群集』(Tarde 1901)において、群集と公衆を区別し、ル・ボンが「群集の時代」を提唱したのに対して、「現代は公衆、もしくは公衆たちの時代」(Tarde 1901: 11=1989: 21)であると宣言しているからである。パークは確かにこの論文においてタルドの著作を引き合いに出しながら議論を展開しており、タルドが扱ったのと同じ言葉を用いて論じているが、これから見ていくように、彼はタルドと同じような形で公衆を考えていたわけではない。

「群集と公衆」論文は三章構成であり、第1章は「群集」、第2章は「社会学的過程」、第3章は「一般意志」と題されている。第1章においては、シーゲレとル・ボンを中心に、当時盛んにおこなわれていたさまざまな群集研究の動向を整理し、第2章においては、人間集団の科学的な捉え方について、過去のさまざまな哲学者の議論や同時代の社会学者の視点を引き合いに出しながら検討し、公衆について独自の定義を行っている。第3章では、ヘーゲルやルソーをはじめとした古典に言及しながら、群集や公衆よりもより恒常的なものとなった集団（たとえば国家）を束ねるものとしての「一般意志」について論じている。

1921年に刊行された『科学としての社会学入門』はパークがバージェスとともに編集した社会学の教科書である。1,000ページを超える大部のものであるが、当時のシカゴ大学社会学科で多くの学生に読まれ、その表紙の色から「グリーンバイブル」と呼ばれていたという (cf. 宝月 2021: 76)。その構成は表の通りである。

表1 『科学としての社会学入門』の構成

第1章 社会学と社会諸科学	第8章 競争
第2章 人間性	第9章 闘争
第3章 社会と集団	第10章 応化
第4章 孤立	第11章 同化
第5章 社会的接触	第12章 社会統制
第6章 社会的相互作用	第13章 集合行動
第7章 社会的勢力	

総論的な位置づけである第1章「社会学と社会諸科学」を除いて、各章は「1. 序論」「2. 資料」「3. 探求と問題」の三部構成となっている。「1. 序論」においては、取り扱うテーマについての概説が示されたうえで、「資料の分類」という項目が立てられて、次の部の「2. 資料」に挙げられるさまざまなテキストの分類が示される。「2. 資料」においては、各章のテーマに関するさまざまな論者のテキストが分類ごとに示される。ここでは、パーク自身の文章が取り上げられることもあるが、大部分は他の論者のものである。スモールやトマスのようなシカゴ大学関係者、ジ

ンメルやデュルケーム、ギディングズなどの社会学者のものもあれば、必要に応じてダーウィンのような自然科学者のものも取り上げられる。そして、「3. 探求と問題」において、取り上げられたテキストの内容を整理し、著者であるパークとバージェスの見解が述べられる。さらに、各章末には文献リスト、レポートのためのトピック、討論のための問題がまとめられている。

この『科学としての社会学入門』におけるタルドへの言及はさまざまな章に及んでいるが、ここでは第6章「社会的相互作用」と、第13章「集合行動」における言及を中心に検討する。まず、第6章においては、社会的相互作用のひとつの形態として「模倣」が取り上げられている。また、第13章においては、群集や公衆、セクトについての問題が取り上げられている。なお、この二つの章も含めて、『科学としての社会学入門』全体を通じて、タルドが書いたものが「2. 資料」のなかで取り上げられることはなかった。一方で、第1章「社会学と社会諸科学」においては、タルドの著作からの引用が見られる⁽⁵⁾。

第2節 群 集

「群集と公衆」論文の第1章「群集」において、パークは人間集団の活動について説明するにあたり、「群集」と「公衆」という二つの基本的な形式の定義をする必要性を指摘する。パークはまず、「群集の本質を既定する最初の試み」(Park [1904] 1972: 6) であるとするシーピオ・シーゲレの『犯罪群集』(1891年)における説を検討する⁽⁶⁾。シーゲレの学説はイタリア犯罪学派の観点から個人的責任と集合的責任をどのようにとらえるべきかという問題を解決するためになされたものであり、個人が集まることで、個々の成員には見られないような性質をもったひとつの全体となると考えられていた (cf. Park [1904] 1972: 6-7)。実際の個人は多様な個性を持っているが、集まることでこうした個性は相殺され、すべての成員が共通に持っている本能的で動物的な性質だけが増幅される (cf. Park [1904] 1972: 8-9)。その後、『セクトの犯罪』(1897年)においては、ル・ボンの影響で、「群集」という言葉をあらゆる集合体を総称的に指すものとして使用するようになり、その中の二つの類型として、暴徒のような狭義の「群集」と、それが慢性的になった形態としての「セクト」を考えるようになる (cf. Park [1904] 1972: 9-10)。

次いで、最も有名なギュスターヴ・ル・ボンの群集論の説明が行われる。ル・ボンの著作はシーゲレにおいて見られるイタリア学派の影響から逃れているが、彼の群集の定義は「その本質においてシーゲレのものと同一」(Park [1904] 1972: 11) である。ル・ボンは個人間の相互性という心理的側面に着目し、それによって個々の人間には見られない新たな集団特性が生じる場合を

(5) 『社会法則』からの引用である (Park and Burgess 1921: 33; Tarde 1898: 38-9=2008: 27)。

(6) シーゲレ、ル・ボン、タルドをはじめとするヨーロッパの群集心理学、犯罪学や催眠研究のような関連分野に関しては、土屋 (2003a) を参照。特にタルドの群集／公衆論については、拙著 (池田 2013) の第6章「模倣論の集合行動への応用：群集と公衆」を参照。

「心理的群集」と呼ぶようになる。この心理的群集は「通常の空間的側面が無視されているという点において言葉の通常の意味とは異なっている」(Park [1904] 1972: 12) とパークは指摘する。すなわち、空間的に一定の限界内に収まると考えられている日常語としての「群集」とは違い、空間的に離れていても「群集」と呼んでよいということである。

また、パスクアーレ・ロッシは、「群集」を集団の発展の系列を総称する総括的な観念としてとらえ、その中で最も未分化で一時的な、一般に「群集」と呼ばれているものから、最も高度な分化が進んだ永続的な「国家」までを配置した。

このように、パークは第1章「群集」においては、シーゲレ、ル・ボン、ロッシの所説を引き合いに出しているが、タルドの群集論について、まとまって論じたところは少ない⁽⁷⁾。

また、「群集」の定義にあたって、パークは人々の間に相互作用があるかどうかを第一の条件としており、一般的な用語としての「群集」で前提とされるような、空間的な近接性は重視していない。

群集という言葉のもっとも明確な意味は、ひとつの場所における多数の個人の集まりというものである。もしそのように用いられるのであれば、群集は積み重ねられた石のようなもの、つまり目の前に現れているか、少なくとも精神的にはひとつの実際の統一体として認識されているような相互に独立した多数の個人というだけにすぎない。このような、その部分の空間的関係性にのみ依拠し、それらの相互関係には依拠していない統一体は、真の統一体ではない。というのも、それはまさしく全体の本質を構成しているその諸部分の動的な相互性だからである。(Park [1904] 1972: 17)

説明科学にとって、空間的並存は群集の本質的な特徴としては使えない。諸個人が群集と呼ばれるようになるのは、彼らが一緒にいるからではなく、彼らの間にその思想や感情が広まっているからである。(Park [1904] 1972: 18)

シーゲレ、ル・ボン、ロッシが、かなり広い意味で「群集」という言葉を用いていたのに対して、タルドは「群集」の概念をかなり限定しているとパークは言う。すなわち「タルドはル・ボンや他の論者よりもはるかに狭い意味で群集という概念を用いている。たとえばタルドは群集と公衆を区別し、セクトを群集の特別な種として含めていない」(Park [1904] 1972: 21-2)⁽⁸⁾。以上の指摘を総合すると、パークにとっては、メディアによって結びつき、新聞記者の暗示にさら

(7) パークは、第1章「群集」においては、シーゲレの『犯罪群集』以前に行われていた、社会的伝染の現象や犯罪の伝染の現象に関する調査研究のひとつとしてタルドの名前を挙げるのみである。「たとえばタルドは、『刑事哲学』において、科学的研究に値するひとつの明確な社会現象として群集をはっきりと挙げている」(Park [1904] 1972: 6)。

されてときに非合理的な判断を下すタルド的な公衆は、「群集」として一括すべきものであるということになるだろう。それでは、パークにとっての「公衆」はどんな存在として想定されているのだろうか。その点について、次節で見ていくことにしよう。

第3節 公衆

タルドは、『世論と群集』（1901年）において、群集と公衆を区別することを提唱した。群集は広場などで物理的空間を共有しながら互いに暗示を与えあうものであるが、公衆は同じ新聞を読むことで同じニュースに同時に触れ、また同時に同じものを読んでいるという自覚を持っている人々とされている（cf. Tarde 1901: 3=1989: 13）。すなわち「散らばった群集」（Tarde 1901: vi=1989: 2）ということになる。

それに対して、パークは不特定多数の集合について、ル・ボンやロッシ、そして『セクトの心理学』以降のシーグレと同じく、「群集」を総称的な概念として見る立場を取っている。したがって、群集と同じように個々の成員の思考や行動が抑圧されるのであれば、メディアが介在した、距離を隔てた集合体であっても「群集」として考えるべきであるということになるだろう。また、パークが群集と公衆を分ける基準として考えていたのは、集合することで個人的な衝動や関心が抑制されるか、それともより促進されるかという点である。群集においてはそれらが抑制されるのに対して、公衆においてはよりいっそう促進されるとパークは主張する。

すべての成員が共通の動因によってコントロールされるということ、そしてすべての純粋に個人的な衝動と関心が抑制されることが群集の特徴であるならば、個人の衝動と関心が共通の意識の漠然とした基盤から現れ、それが個別の双方向的相互作用においてさらに発達していくことが、公衆の特徴ということになる。（Park [1904] 1972: 50）

それでは、個人的な衝動や関心が大きくなるとどうなるだろうか？この記述に続けてパークは、公衆においては対立的な相互作用が重要な位置を占めていると主張する。

（8）パークは、タルドが群集と公衆の区別を主張している箇所を引用しておらず、出典表記のみ行っている。該当箇所の記述は次の通りである。「群集は魅力的で、見る人の眼をいやおうなくうばうばかりではない。群集という名を聞いただけでも、現代の読者はひきつけられてしまう。そこで著述家のなかには、このアイマイなことばで、あらゆる種類の人間集団を意味させようとしすぎるかたむきがある。こういう混乱はやめてもらわねばいけない。ことに、群集と公衆とを混同してはいけない」（Tarde 1901: 1=1989: 11）。また、セクトを群集の中に含めていない点について、パークは下記の部分を挙げている。「群集は、大多数の成員が紳士であるばあいにも、激情的な犯罪や、瞬間的な精神異常からの犯罪へ、たやすく引き込まれがちである。ところが党派は、強烈で粘りづよい情熱にあおられたとしても、反省の上の計算づくでしか犯罪を犯さない。しかもその犯罪にはいつも、党派の人種のレッテルがくっきりと貼られているし、犯罪はその集団の性質と一致している」（Tarde 1901: 202=1989: 203-4）。

公衆の概念をより詳細に検討する前に、公衆の内部で生じるこれらの関心の間の相互性の過程についてははっきりと理解しなければならない。社会全体のなかで、これらの相互的関心は、互いにチェックしあい、定義しあう政党や学派、セクトといった部分によって示されている。政治においてはつねに互いに対立しあう自由主義党と保守主義党がいるのと同じように、経済活動においては——そこでは関心の個人化がよりはっきりしているが——買い手と売り手が同じような相互的關係に関わっている。それぞれの場合において、一方の側は相手の側の存在を前提としており、双方とも相手がいなければ今の状態をそのまま保つことはできないだろう。(Park [1904] 1972: 50)

このような対立関係は、ジンメルであれば「社会分化」と表現するようなものであるが (cf. Park [1904] 1972: 52-3)、この論点についてタルドは特に力を入れていたとパークは指摘する。以下に引用したパークの文章にあるように、タルドは1895年に『模倣の法則』の第2版を刊行した際に追加された序文において、「ただ単純に模倣するという謙虚さも発明する力もとくにもちあわせていない場合」に人々が行うものとして「反対模倣」を挙げており (Tarde [1890] 1895: xii=2016: 16)、それだけでなく、「対立」そのものを主題とする単著『普遍的対立』(Tarde 1897) を発表するに至っている。

集団も個人もはまり込んでいるこの特別な相互的関係はいくつかの基本的観点から研究されてきた。タルドはこの概念を規定するのに一冊の本を費やし、この種の社会的相互作用を、一般的過程である反対=反復 *contre-répétition* の一形態に帰着させようとした。彼が言うには、対立は模倣の特別な一種に他ならない。(Park [1904] 1972: 51)

このように、「群集と公衆」論文においては、パークはタルドの公衆についての議論にはあまり立ち入ることなく、対立関係の存在を公衆の特徴とみなしていることがわかる。それに対して、『科学としての社会学入門』の第13章「集合行動」においては、タルドの議論に言及したうえでより明示的に批判をしている。そこでパークは、タルドが『世論と群集』において展開したような、マス・メディア（新聞）を通じて間接的につながっている人々を指すものとしての「公衆」に反対し、接触の手段によって公衆を規定するのではなく、内部に対立関係が存在し、そこで二つの陣営に分かれて議論が展開されるようなものこそが公衆なのだと規定する。このような主張は、1904年の学位論文における主張からまったく変わっていない。

タルドによれば、公衆は印刷機の産物である。群集の限界は声が届く長さ、目で見ることが出来る距離で決定される。しかし公衆は、暗示が観念の形で伝達され、そこに「接触なき

伝染」があるような高度な社会的発展段階を前提としている。／しかしながら、群集と公衆の根本的な違いは数やコミュニケーション手段によってではなく、相互作用の形態と効果によって評価されるべきである。公衆においては、相互作用は討論の形をとる。諸個人は互いに批判的に振る舞う傾向にある。論点が提起され、党派ができる。意見が衝突し、そうして互いに修正しあい、和らげられる。(Park and Burgess 1921: 868-9)

このように、パークはタルドのように人々の接触が直接的なものであるかメディアを通じた間接的なものであるか、という点は問題にせず、集合心によって人々の個人的関心が抑制されるか、それとも拡大されるか、対立関係が生じて議論が繰り広げられるか、といった点を重視したことがわかる。それでは、このような立場の違いがどのような学説の違いとして現れているのだろうか？パークとタルドの記述を比較してみよう。

まず、メディアによって間接的に接触している集合体が、ときにタルドが指摘したように、非合理的な判断、行動をすることをパークも認識していた。「群集と公衆」論文において、パークは世論について次のように述べ、それが群集のような非合理的な判断に傾くことが多いことを示唆している。

世論はさまざまな対立しあう個人や集団の批判的な行動から生じる社会心理学的現象である。しかしながら、通常公衆と呼ばれているものは、おおむね群集と同じ認識＝発達の段階に立っている集団の一種である。したがって、いわゆる世論は一般に謳い文句によって操作されやすい素朴な集合的衝動以上の何ものでもない。近代ジャーナリズムは出来事を報告し論じることによって世論に教え、世論を導くものとして想定されているが、通常は単なる集合的注意を統制するためのメカニズムであることがわかっている。このようにして形成される「意見」は無分別な知覚から引き出された判断と論理的に近接した形態を示している。つまり、意見は情報を受けとると直ちに同時的に形成される。(Park [1904] 1972: 56-7)

また、パークが強調する公衆のなかでの対立的関係や、討論の存在、個人の衝動や関心を拡大させるという特性について、タルドの議論と対比してみよう。公衆における討論については、タルドはより重要性を失っていることを指摘している。『世論と群集』の第2編「世論と会話」において、新聞とともに世論を作り上げる要因となっている会話について、討論の占める位置がますます小さくなり、単なる情報交換のほうが増えていくことを指摘している⁽⁹⁾。

会話はいろいろに区別できる。しかし二義的な区別はさておき、まず闘争的会話と交換的会話、つまり討論と意見交換とを区別しよう。やがて意見交換が盛んになって、討論がおと

ろえることは（後でまた触れるが）疑いない。（Tarde 1901: 87-8=1989: 93-4）

会話の移りかわりをみたとき、もうひとつ、ひろくみとめられる大きな傾向がある。すなわち、会話の流れは気まぐれのような紆余曲折を見せながらも、一貫して、闘争をすくなくし、しだいに意見の交換の色を濃くしてきた。（Tarde 1901: 108=1989: 111）

一方で、個人の衝動や関心の拡大については、タルドは両義的な考えを持っている。タルドによれば、公衆の多くの成員は能動性を示さないままであるが、才能のある新聞記者はより自分の意見を押し通すことができるようになることを強調しており、この点では群集における指導者よりも個性の発揮がしやすいと考えていたように思われる。

危機的な情勢のときに新聞記者が世論をつくりあげることが、否定できない。政治部なり学芸部なりの指導的記者が2、3人、おなじ旗のもとにすすんで集まれば、どんなにいけない目的でも、成就しないことはない。最後に形成されながら、しかも民主主義的文明の進展につれてもっとも発展の途につくだろう社会集団、すなわち公衆という社会集団は、きわだった個性には自己を押し通す便宜をいちばん与え、独創的な個人の意見には普及の便宜をいちばん与える集団である。（Tarde 1901: 21=1989: 31）

このように、パークの考える公衆は、少なくともタルドが群集と区別すべきものとして考えていた、メディアによって結びついたものとは異なっており、合理的な討論の担い手となるような存在に近いものとして想定されていたことがわかる。このような公衆の考え方は、後のブルーマーが考えた公衆の考え方にも受け継がれ⁽¹⁰⁾、今日の社会学で一般的に考えられている「公衆」概念として定着することになったのだろう。

第4節 模倣

パークが群集や公衆を論じるにあたって、模倣の観念は避けて通れないものであった。この節ではパークがタルドの模倣論をどのようにとらえていたのかを検討する。「群集と公衆」論文に

（9）パークは先に引用したように、政治や経済における対立関係を重視しているが（cf. Park [1904] 1972: 50）、タルドはこうした領域においても、その背後にある共感関係を強調している。「経済学者は、商品やサービスの買い手たちを、その欲求対象を争いあう競争者とだけみなす。けれども買い手たちは、競争者であると同時に、いやそれ以上に、同業者であり仲間であって、彼ら仲間の類似性を強化し、彼らの仲間でない人とのちがいをきわだたせようと努力している。彼らの欲求は、仲間の人びととの欲求によって育てられる。競争するときでさえ、ひそかな共感があり、増大させられている。しかも、おなじ新聞を毎日読むことによって読者のあいだにむすばれるむすびつきは、はるかにもっと緊密で、はるかに深い！ここには、競争のことを口にしようと夢みる人さえない。暗示された思想の一致と、この一致の意識とがあるだけだ」（Tarde 1901: 19=1989: 29）。

において、パークは社会集団を記述し、説明するには、物理学や生理学のようなアプローチではなく、心理学的なアプローチをしなければならないと考えている。彼は「社会学は必然的に社会心理学となることが明らかになるだろう」(Park [1904] 1972: 26) と述べている。そのうえで、社会を構成要素に分解して考察するというタルドと同じ手法を提唱している。

社会学が関係する基礎的な単位とは何だろうか？あらゆる説明的科学に共通の過程は対象をその構成要素に分解することから成り立っているということが立証されることになった。それによって全体がそれらの要素の関係性から説明できることになる。(Park [1904] 1972: 26)

パークによれば、たとえば、物理学においては原子が基本的な単位とされ、生物学においては細胞が基本的な単位とされて、それらの相互作用に着目して現象が記述され、説明される。それに対して、社会学においては、個人を基本的要素としてみなすことがまず考えられる。しかしパークは、イギリスの古典経済学と集合心理学の立場を対置し、前者は、功利主義的な個人を前提とするものであり、完全な自由を持ち自分の利益を最大化するように振る舞う、一貫した個人であるのに対して、後者は必ずしも功利主義的に振る舞うことはなく、半ば本能的に振る舞う部分を持ち、相互作用の過程で変化し、必ずしも一貫した自己とはならないものと想定されている (cf. Park [1904] 1972: 28-9)。このような、集合心理学的な見方の原点として、パークは「模倣論」を挙げる。

このような科学のはじまりは、いわゆる「模倣論」において見いだされ、それはフランスやアメリカの著作においてさまざまな形で見られた。たとえばフランスにおいては、タルドが経済学の古い理論の心理学的概念と前提を批判した。彼の意図は、個人のものから社会心理学のものへと経済学の視点を移行させることである。アメリカ人のボールドウィン¹⁰は、社会学的相互作用によって、集団だけでなく、感覚をもった個人——すなわち経験的人格として見られた個人——も生み出されていることを説明しようとした。／このことがはっきりと

(10) ブルーマーが考える「公衆」の特質においても、パークが考えていた「対立」関係の存在が明確に示されている。「公衆の特質は、何が成されるべきかについて公衆が不一致によって、したがって討論によって特徴づけられるということである。この事実は多くの含意を持っている。ひとつあげるならば、それは公衆において生じる相互作用が、明らかに群衆のなかで起こる相互作用と異なっていることを示している。群衆はうろつき、関係を深め、不一致によって汚されていない全員一致に到達する。公衆は解釈に基づいて相互作用し、議論へと入り、結果的に闘争的關係によって特徴づけられることになる。したがって、公衆における個人は、群衆において生じるように自己意識や批判能力を失うのではなく、自分の自己意識を強化させ、その批判力を高めやすくなる。したがって、相互作用は群衆が示しているような相互支持や全員一致ではなく、対立へと向かうことになる」(Blumer 1946: 190)。

示しているのは、ボールドウィンもタルドも個人それ自体を社会学における基本的単位とは見なしていなかったということである。[……] ボールドウィンは個人をよりいっそう社会過程の結果として見なそうとしている。さらにこのことは、さまざまな論者が基本的単位について一致できなかったことを示している。つまり、タルドはそれを欲求と信念として見ていたのに対して、ボールドウィンは観念がこれらの基本的単位を構成すべきと主張していた。(Park [1904] 1972: 30)

ボールドウィンもタルドと同じく、「模倣」に着目した学説を展開した人物であり、タルドの『社会法則』の英訳刊行にあたり序文を寄せるなど、タルドの社会学の英語圏における普及に寄与した。ただし、同じ「模倣」を基礎においても、タルドとボールドウィンでは力点の置き方が異なっている。ボールドウィンは、心理学者ということもあり、相互作用が行われることで、自己そのものが変容していく過程に関心を持っていることが指摘される。タルドについては、この部分では明確に書かれていないが、ボールドウィンほどは個人の内部の変容に焦点を当てておらず、群集や集団の生成と変化のほうを強調していることになる。

パークが述べているように、タルドは社会の基本的単位を「欲求と信念」に見出していたが、この点はタルドが最初期の論文「信念と欲求」(Tarde 1880) 以来、ほぼすべての著作において、何度も論じてきたものである。これらは質的なものを捨象された純粋に量的なものとされ、これらが別々の個人の間で模倣によってやり取りされると想定されている。

このように、タルドの模倣論の原理にも触れながら、パークは自らが考える社会学の基本的な単位について次のように示している。

筆者 [=パーク] は、この2人の論者 [=タルドとボールドウィン] の間の不一致は彼らの観点における何らかの相違に由来すると考える。[……] ここでは、社会学の根本的な単位は、集団状況において相互作用を行う諸個人の意志的な態度と理解しておくことにする。これらの態度は感情(欲求と信念)として表現することもできれば、意識的な観念として表現することもできる。(Park [1904] 1972: 30-1)

一方で、『科学としての社会学入門』においては、先に述べたように、第6章「社会的相互作用」において、「模倣」が取り上げられている。ただし、タルドの著作からの抜粋を直接掲載することではなく、「資料」として抜粋された部分のなかにタルドの模倣論についての言及が含まれている。たとえば、「模倣の定義」についての抜粋は、ポール・モンロー編『教育百科事典』(*A Cyclopedia of Education*, 1910-1913) における「模倣」の項目から採られており、それはアメリカの心理学者チャールズ・H・ジャッドによるものである。そこでジャッドは、タルドが「その

著『模倣の法則』において、模倣があらゆる社会的発展に通底する基本的な事実であることを指摘した」(Judd 1912: 388; Park and Burgess 1921: 390)と述べたうえで、社会における模倣の働きについて、いくつもの模倣の流れの間に闘争が繰り広げられることを強調している。

複雑な社会においては、さまざまな模倣が自分たちの身を立ようとし、闘争状態にすることが頻繁に見いだされる。こうして、服装によって流行を作り上げようという傾向はつねに、より単純な流行を目指す反対の傾向によって制限を受けている。複数の傾向の闘争によって、個人は任意のいつの時点においても提示された例示からの変異へと向かうようになり、結果的に従うべき新たな例示が生まれることになる。このように複雑な社会的例示は闘争の産物である。(Judd 1912: 388; Park and Burgess 1921: 390)

また、第13章「集合行動」におけるパークとバージェス自身による「探求と問題」のセクションにおいては、タルドの模倣論はかなり批判的に論じられている。パークとバージェスは『模倣の法則』においてタルドが「模倣」という言葉に与えた定義、すなわち「意図されたものであるかないか、あるいは受動的なものであるか能動的なものであるかにかかわらず、精神間で生じる写真撮影のこと」(Tarde [1890] 1895: viii=2016: 12)、および1898年に刊行された『社会法則』における社会的事実と模倣を同一視するような「社会的事実のあらゆる恒常的特徴は、まさに模倣的であることにある。そして、この特徴はもっぱら社会的事実固有のものである」(Tarde 1898: 37=2008: 28)という記述を挙げたうえで、その概念が不当に広いことを批判している。

このような模倣概念の不当な拡張において、タルドは明確に科学の許されざる罪を犯した。つまり彼は模倣行動の注意深い研究と粘り強い観察の代わりに、社会における一様さについての安直できらびやかな一般化を行ったのである。模倣の実際の過程の理解に対する貢献は心理学者たちに由来するものであった。ボールドウィンは模倣における刺激と反応の相互関係を説明するために循環反応という概念を押し進めた。彼はまた、自己が他の自己とのギブ＝アンド＝テイクの過程において発達するような、人格成長の弁証法の記述において、人格発達における模倣の位置づけを示した。デューイ、スタウト、ミード、ヘンダーソンといった人々は、模倣による模倣の神秘的説明の無益さを強調し、学習過程としての模倣に対する関心と注意の影響を指摘した。ミードは社会状況の鋭い分析によって、模倣を人間が社会的生における役割を実践する過程として解釈している。(Park and Burgess 1921: 423-4)

ここでもボールドウィンの「模倣」概念が取り上げられ、それが人格発達に及ぼす役割が指摘されている。こちらの側面からさらにデューイやミードの議論へのつながりをパークは見通して

いる。ここで言及されている「循環反応」(circular reaction)はブルーマーの群集論においても言及されており (cf. Blumer 1946 : 170-1)、ボールドウィン自身は心理学者であるが、シカゴ社会学派における議論においても重要な位置を占めていたことがわかる。一方で、タルドの模倣論に対してパークはかなり批判的な言及をしているが、経済学において功利主義的な人間像に対して、もうひとつの説明の仕方を用意したこと、公衆論においても見られた「対立」の観点を持つことなどは、積極的に取り入れたと考えることができる。

結 論

パークのタルドに対する言及について、「群集」「公衆」「模倣」というタルド自身も用いていた概念を中心に確認してきた。「群集」については、タルドのようにメディアによって結びついた集合体を切り離すことはせず、総称的な用語としての「群集」という枠組みを維持することをパークは主張した。また、「公衆」については、メディアによって結びついていたとしても、集合的な圧力によって個人の関心と衝動が抑圧されるような場合は「群集」という枠内で考えることとし、個人の関心と衝動が集合することで強められ、それらが対立的な関係を生み出して合理的な討論がなされるような集合体を「公衆」という枠組みでとらえている。ただし、そのなかでパークはタルドの「対立」論に依拠することとなった。「模倣」については、パークはタルドが功利主義的な行為以外の視点をもたらしたことを評価する半面、社会を説明するうえで「模倣」という用語を不当に拡大しすぎたことを批判し、心理学の枠内でとらえていたボールドウィンの見方を高く評価した。実際に、その後のアメリカ社会学においてクーリーやミードが自己についての考察を深めていくのも、タルドというよりはボールドウィンの方向であるように思われる。

とはいえ、パークが否定的であれ、タルドの議論に対してかなりスペースを割いて論じていることは注目すべきところである。ヒューズが指摘しているように、『科学としての社会学入門』においては、「資料」としてタルドの抜粋が用いられたことなかったが、人名索引で数えると、タルドは40か所で言及され、かなり多い件数を示している。ジンメルは43か所とタルドより多いが、30回以上言及されているのは、ほかにダーウィンとスペンサーだけである (cf. Hughes 1961: 554)。また、「群集と公衆」論文においては、『模倣の法則』、『世論と群集』だけでなく、一般にはあまり参照されない『普遍的対立』や『経済心理学』など多くの著作に言及されていることも指摘しておかなければならない。さらに、内容的に見ても、群集と公衆については、区分線をどこに引くかという点での違いであり、現実としてメディアでつながる人々のなかで群集のような非合理的な振る舞いが多く見られること自体は否定していない。「公衆」をめぐる議論は同時期の W. リップマンとデューイとの論争と同じような論点とも考えられ、さらに検討が必要となるだろう (cf. 岡田 2003)。

パークがタルドの議論のなかでは「対立」を重視していたことがわかったのが、本稿における

最も重要な点である。パークは社会的相互作用のたどる過程として、競争→闘争→応化→同化という図式を設定し、都市における人間生態学的な考察に応用しているが、ここでも「ソサエティ」に入る段階として「闘争」を位置づけている。「闘争」という相互作用の類型については、パークが直接師事したジンメルも重視したものであり（cf. Simmel 1908=2016上）、ジンメルからの影響と考えることが順当ではあるが、応化から同化までを見越した過程としては、タルドの模倣→対立→適応という図式（cf. Tarde [1890] 1895=2016, 1898=2008）も何らかの影響を及ぼしたと言えるかもしれない。この点については次の課題としたい。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP22K01939の助成を受けたものです。

参考文献

引用文中の〔 〕は引用者による補足や省略を表す。

秋元律郎, 1989, 『都市社会学の源流——シカゴ・ソシオロジーの復権』有斐閣。

Blumer, H. G., 1946, Collective Behavior, in A. M. Lee (ed.), *New Outline of the Principles of Sociology*, New York: Barnes & Noble, 167-222.

Clark, T N., 1969, Introduction, in G. Tarde, *On Communication and Social Influences*, Chicago: The University of Chicago Press, 1-69.

大道安次郎, 1972, 「解説」 R. E. パーク・E. W. バージェス・R. D. マッケンジー（大道安次郎・倉田和四生訳）『都市——人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会, 157-77.

Ginneken, J. v., 1992, *Crowds, Psychology, and Politics, 1871-1899*, Cambridge: Cambridge University Press.

Guth, S., 2012, *Robert E. Park : Itinéraire sociologique de Red Wing à Chicago*, Paris : L'Harmattan.

宝月誠, 2021, 『シカゴ学派社会学の可能性——社会的世界論の視点と方法』東信堂。

Hughes, E. C., 1961. Tarde's *Psychologie Économique*: An Unknown Classic by a Forgotten Sociologist, *American Journal of Sociology*, 66(6), 553-9.

池田祥英, 2013, 「ガブリエル・タルドの社会学理論——模倣論とその応用」早稲田大学提出博士論文。

Joseph, I., 2001, Tarde avec Park: À quoi servent les foules?, *Multitudes*, 7 : 212-20.

Judd, C. H., 1912, Imitation, in Paul Monroe (ed.), *A Cyclopedic of Education*, vol.3, New York : MacMillan, 388-9.

Le Bon, G., 1895, *Psychologie des foules*, Paris: Félix Alcan. (櫻井成夫訳, 1993, 『群衆心理』講談社.)

岡田直之, 2003, 「リップマン対デュイ論争の見取り図と意義」廣瀬英彦・岡田直之編『現代メディア社会の諸相』学文社, 167-200.)

Park, R. E., 1904, *Masse und Publikum*, Bern: Buchdruckerei Lack & Grunau. (C. Elsner (trans.), 1972, The Crowd and the Public, in H. Elsner Jr. (ed.), *Robert E. Park: The Crowd and the Public and Other Essays*, Chicago: The University of Chicago Press, 1-81.)

———, 1950, An Autobiographical Note, *Race and Culture*, Glencoe: Free Press, v-ix. (町村敬志訳, 1986, 「自伝的ノート」町村敬志・好井裕明編訳『実験室としての都市——パーク社会学論文選』御茶の水書房, 3-10).

Park, R. E. and E. W. Burgess, 1921, *Introduction to the Science of Sociology*, Chicago: The University of Chicago Press.

Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action*, New York: McGraw Hill. (稲上毅・厚東洋輔訳, 1986, 『社会的

行為の構造』(3 デュルケーム論) 木鐸社.)

Simmel, G., 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung* Berlin: Duncker & Humblot. (居安正訳, 2016, 『社会学——社会化の諸形式についての研究』(上・下) 白水社.)

Sorokin, P. A., 1928, *Contemporary Sociological Theories*, New York: Harper & Brothers.

Tarde, G., 1880, La croyance et le désir, *Revue philosophique*, 10 : 150-80 ; 264-83.

———, [1890] 1895, *Les Lois de l'imitation*, Paris : Félix Alcan. (池田祥英・村澤真保呂訳, 2016, 『模倣の法則』[新装版] 河出書房新社.)

———, 1897, *L'Opposition universelle*, Paris : Félix Alcan.

———, 1898, *Les Lois sociales*, Paris : Félix Alcan. (村澤真保呂・信友建志訳, 2008, 「社会法則」『社会法則／モナド論と社会学』河出書房新社, 5-122)

———, 1901, *L'Opinion et la foule*, Paris : Félix Alcan. (稲葉三千男訳, 1989, 『世論と群衆』未来社.)

土屋淳二, 1993a, 「R. E. パークの『群衆と公衆』論にみる集合行動論の視座」『年報社会学論集』6 : 37-48.

———, 1993b, 「R. E. パークの社会過程論と集合行動への視座」『社会学年誌』34 : 117-32.

———, 2003a, 「『群衆の時代』から大衆社会へ——集合行動研究への眼差し」田中淳・土屋淳二, 『集合行動の社会心理学』北樹出版, 25-44.

———, 2003b, 「社会解体から社会創発へ——シカゴ学派のアプローチ」田中淳・土屋淳二, 『集合行動の社会心理学』北樹出版, 45-66.